
俺と小さな魔法使い

神楯零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と小さな魔法使い

【Zコード】

N7101R

【作者名】

神櫛零

【あらすじ】

平凡な『俺』と、夢見がちな女の子で幼馴染みの離鳥美羽。ひなとりみはね そんな二人の普通だけど、優しい毎日。のほほんと和んでお楽しみください。

小さな魔法（前書き）

【smile map】の企画作品です。

小さな魔法

「小さな魔法」

「ねえねえ。キミ魔法が使えたるとか思わない？」

帰り道。幼馴染みの雛鳥美羽は唐突にそんな電波な事を言った。高校生にもなつてそんな事を本気で言つた女子は病院に連れていくべきなんだろうが、俺は気にしない。だから俺はいつもおつりに返す。

「思わない」

「そう！ そうだよね！ キミもさう思つよ？ 魔法が使えた最高だと……って思わないの？？」

「ノリツッ」「ミは古いと思つぞ」

「それだと話が繋がらないでしょ！？」

「いいじょん別に……ぶつちやけ面倒臭いし

「ぶつちやけないで！ そこは乗つかつてよお！」

手足をぶんぶん振り回しながら叫ぶ美羽。やはりナイスリアクション。近所迷惑だからこじるのはこれくらいにしておくか。

「あ～はいはい。使えたらしいね～俺もそう思つよー」

「その棒読みのお手本みたいな棒読みは気になるけど……キミもなう思つよね！」

「そこからやり直すのか……」

「それでねそれでね！ アタシは魔法が使えたら

「世界を滅ぼしたいと？」

「そうそうビカーン！ つて違うよつー」

「じゃあ世界征服

「やつそつ世界はアタシのモノだあーーー！ つて違うよつーつー

「夢の無い奴だ」

「どつちがだよお！！」

手足をぶんぶん回しながら叫ぶ美羽。相変わらずナイスリアクションだが回りを見る目が痛い。

「お前は魔法が使えたらどうするんだ？」

「む……無理矢理戻すんだ。まいいか！ 私が魔法が使えたら空を飛べたらいいなあって！」

「鶏のようにならうか？」

「そう。羽を一生懸命羽ばたかせて……って跳べないよ！？」

「いやいや……結構飛ぶぜ鶏。数メートルくらいは」

「飛んだ内に入んないよお！？」

「じゃあ人鳥ヒンギン」

「それも飛べないよお」

再び手足をバタバタさせる美羽。いやその姿は人鳥みたいで可愛いんだけどな。

「ぐす……真剣に聞いてよお～」

「俺はいつでも真剣だ」

「絶対ウソだあ～！」

「マズイこれ以上やつたら泣かせてしまうな……」

「わかった。わかったから泣くな

「な、泣いてないモン！」

「涙声で何言つてんだよ」

「ううう。いいモン知らないモン！」

拗ねてしまった。本当に高校生かよ。ふむ。こうなつたら面倒なんだよな。なら、引いて駄目なら押して駄目ならスライドさせて見るか。

「そうか。俺が悪かつたな」

「…………え？」

食いつきいいな。入れ喰いだな。

「潔く諦めよう！知らないなら仕方ないしな！」

「あ……諦めないでえ～！！」

「んで。空飛んでどうじょうつと言つんだ」

「……やつぱり無理矢理戻すんだ。天使みたいな白い羽で跳べたら素敵でしょ？」

「…………」

「何一つ無い不自由な空！ 綺麗な空を飛べたら……とても気持ちいいと思つた」

「…………」

「それでね色々なトロロを空から見るの！ 漂い綺麗だよ。きっと！」

俺は領空侵犯とか、鳥人間出現でマスクミニが騒ぎになるなどか、空は排気ガスが漂つてゐるだろ?などか……そういう夢の無い言葉を引っ込めた。

俺だつて空氣は読める。たまにはコイツの絵空事を聞くのも楽しい。美羽は本氣でそう思つてゐるんだろう。馬鹿で幸せな奴だけど……そう言つ奴が隣で笑つてゐるところまで笑顔になつちまつ。そう言つ不思議な奴だ。

「つたく……もう魔法が使える癖に贅沢言いやがつて」

「え？ エ……えええ！！？ アタシ魔法使えるのぉ！？」

「ああ。お前にしか使えない飛び切りの奴がな」
小さな魔法だけどな。それは大切なモノだ。

他人を笑顔に出来る小さな魔法。

「なになに！？ なにソレ！？」

自覚が無い所がまたな……

「自分で気付け馬鹿」

「ば、馬鹿つて何よう！？」

「馬鹿凄い馬鹿」

「酷くなつてるよー！？」

「ふと……思つた。」

「俺が魔法が使えたら……」

「え」
何?

「お前どうして問題のたる魔去が欲しいんだ？」

卷之三

顔を真っ赤にして手足をバタバタさせる美羽。

「一〇まで驚

「え！ ええええ！ ！？？」

「急に言われても困るか。」

「全然讓歩してないよお！！？？」

「レバノン」

「な、なんだ……本気かあ……つて本気なのー?」

「ああ」

「ええ、なんでもない。」

「宜しくな美羽」

賄やかな帰り道を傍邊に歩く
隣には幻馬染み……いや恋人が居

夕暮への空に顯つた。

「信じる魔法」

「信じる魔法」

何事にも飽きが来る。永遠と繰り返していれば飽きが来る……と言つが……

「もう……キミは意地悪過ぎだよお」

美羽イジリは決して飽きない。多分永遠に繰り返しても。

「そんなに怒るなよ。飴ちゃんあげるかひ

「アタシはそんなに子供じゃないよお……」

「イチゴみるくキャンディーだ」

「わあい……！」

子供だった。しかも幼稚園ぐらいいの。

見かけ（146?。小学生並）も精神的にも子供だ。
並んで歩けば妹と思われる。

「おいしー」

幸せそうな顔して飴を舐める美羽。…………可愛いなオイ。

「……これと一緒に舐めるとなお美味い」

そう思うと悪戯したくなるのは性だよな

「ホントにー！」

俺が渡した赤い色の飴を何の疑いも持たずに口に放り込む美羽。

「～～～！？」

顔を真っ赤にして手足をぶんぶんさせる。

「なにコレ～～～！？」

「チョコキムチ味」

「奇跡的な味だよお～」

「じゃあいいじゃん」

「悪い意味でだよ～」

「どうしてそんな意地悪するんだよお～」

「つい

「ついじゃないよお～」

相も変わらずナイスリアクション。しかし……自分でやつて置きながら言つのもなんだが……騙されやすいよな。

将来詐欺とかに引っかかるかも……

「

「なんだ？」

美羽は不思議そうに首を傾げる。

「なんでもってそりゃ……」

「疑うより信じる方が簡単だもん」

気軽にそんな有り得ない事を言つ美羽。その顔を見ればそれが本気だと分かる。

「…………」

信じる前に疑つてしまつのが人間だ。疑う前に信じる。信じる事を疑わない。そんな事が許されるのは子供の時だけだ。

「俺は」

「ん？ なあに？」

「いや…………」

無垢なお前の笑顔はこれからも俺が守る。汚れ役は望む所だ。美羽は純粋なままで居て欲しい。願わくば……俺もそうであつたかつた。

「…………うーん。正確にはちょっと違うかも」

「…………は？」

「そうだ！ キミだからかな。キミの言ひ事はほとんどホントの事だもん」

「…………」

「やつぱりキミの事が好きだからかな？」

「…………！」

恥ずかしい事を笑顔で言つ美羽。いつもが赤面せられるとは…

……流石に虚をつかれた。

「疑う事も嘘も生きていく為に必要だもん。子供じゃないからソレ
くらいい解るよ」

「……」

「それでも……それでもね」

そう言って微笑んで。俺にとって。魔法の言葉を美羽は紡いだ。

「好きな人は信じてるよー」

また逢える魔法

「また逢える魔法」

「さよなら」

そう言つのは簡単だ。

「またね」

でもその後にさう言つのは難しい。

「君は可哀相だ」

そう彼女は俺に言つ。

「君の魔法は報われ無い」

心から憐れむように彼女は言つ。

「何一つ。誰一人救えない。そんな魔法だ」

「どうしても」

俺は言い返す。これだけは言い返さなければならない。

「それでも何もやらなかつた方がよかつたなんて俺は思いたく無い」

」
.....
」

四〇

発端は単純明快だ。

「…」
女の子が電柱にしづくまつている。周りは気付いた様子も無く、通り過ぎていく。

よつに扱う。

俺もまた、女の子の前を通り過ぎる。

予定が追加された。

「ハビ」に入る棒付きの飴玉を「ハミ」購入する
しめて120円。

再び俺は女の子の所に戻る

「——あるから配するな。要らないな」共俺が食べる

「ミルクキャンディー」と「コーラ」だ

..... o o

「苺ミルクか。じゃあ俺」「一ラ」

「モルクキャンパー」を女子に手渡す。

「…………」

「別に礼なんて要らない」

「…………」

「ガキに見返りを求めるか」

「…………」

「やっぱ迷子か」

「…………」

「俺は居ないから。分からぬけどな。でも淋しいのは嫌だよな」

「…………」

「俺はいつでもここに居る訳にはいかない。だからいづれ俺も居なくなる」

「…………」

「だから捗してやるよ……お前の母親」

「…………」

女子は嬉しそうにそつと言ひ立ち上がった。

「…………」

「別に……気が向いただけだ」

「…………」

「確かに。やっぱアイツに影響されてんのかな」

「…………？」

「俺の幼馴染みで恋人だ」

「…………」

「茶化すな」

俺達は歩く。人気の無い場所へと歩いていく。

「…………」

「…………で別れたのか?」

「…………。…………。

「…………。…………。

「そうか」「

しづらひ歩き回る。

「…………。…………。「…………無くしたぬいぐるみ?…………探せつてか?」

「…………」

「分かつた。分かつたから睨むなよ

とは言つても熊のぬいぐるみ何て…………何処に?

「…………ん」

木の陰に何があった。太い枝が地面に刺さっていた。

「…………」

枝と手を使い、地面を掘る。すると、

「…………!…………!…………!」

泥や土で真っ黒になつたぬいぐるみがあつた。時間が立つている

のか原型が何なのか分からぬ。

「成る程…………これが」

「…………!…………!…………!」

「別に、感謝される覚えは無いけどな」

「…………」「母親からのプレゼントか…………それは大事にしないとな

「…………?…………!」

「迎えに来た…………?俺には見えないな」

「…………!…………!…………!」

「だから礼なんて要らない。早く行けよ。待つてるんだろう?」

「…………?」

「…………。俺は行けない待つてる奴が居るからな」

「…………」

「…………!…………!…………!」

「またな」

「…………!…………!…………!」

うん。バイバイ！　おにいちゃん！

「……」

女の子はもう居なくなっていた。家に帰ったのだろう。

「……またな

もう一度と逢えないと分かっていても俺は、そう言つた。

寄り道も終わり帰宅していると、

「あつ。キミ何してるの？」

「……美羽か

美羽と一緒に帰る事になつた。

「迷子を送つていつてた

「わあ！　優しいねキミは……」

「別に……」

分かれ道。俺は右に。美羽は左に。

「じゃあ……またね！」

俺はさよならは言わない。さよならは悲しい魔法だから。もう一度逢えるように。願いを込めて。

「ああ……またな

「俺と小さな魔法使い」

「俺と小さな魔法使い」

「後悔はないのかい？」

「後悔ならいつでもしている。」

「違う違う。生きてきた事にだよ」

「そういえば。こんな事を言いやがる母親だった。意味が分からぬ事をどんどん言いやがって。」

「話しを逸らすなよ。誰よりも死に近いキミだ。どうなんだね」

「逸らしてるとつもりはねえ。」

さあな。生きてる事自体……俺には分からない。でもな。

「でも？」

人は誰でも魔法が使えるんだよ。小さな取るに足らない魔法だ。でもそれでも人は救える。

ならそれって生きてるってコトだ。そう言つ奴を……俺は知つてるから。

「……言つよくなつたなガキが」

満足そうに笑う。今氣付いたがコレは夢か？

「違うし、合つてゐる。ただ境界が曖昧なだけだ」

意味が解らん。

「でもキミはもう「」に来る必要は無い。母離れつて奴だ」

「やつば母さん（アンタ）だったのか……」

「じゃあな。魔法使い。美羽ちゃんに宜しく」

ああ……

「…………キミ……」「

五月蠅いな……眠いんだよ……

「キミ……」

「うお！……？」

びっくりして田が覚める。田の前には美羽が。
あれ……なんで？

「大丈夫？ 今日ずっと寝てたよキミ」

「はあ……つーか何で俺の家に？」

「窓が開いてたよー」

「さて……110は」

「誘拐されたーって言つよ？ 泣くよー？」

「脅迫もいいとこだなオイ」

「キミの真似ー」

「…………」

なんつか……妙な夢見てた気がするが……「イツのせいでどうでもよくなってきたな。

「はあ……」

「むう？ 何だよーそのどうしようもないなー「イツって田は？」

「実際……どうしようもないだろ」

「ふふ

「ははつ」

俺の幼なじみは魔法が使える。他人を笑顔にする魔法。

それは『笑顔』。

俺と小さな魔法使い。これからもきっと。

「俺と少わな魔法使い」（後書き）

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7101r/>

俺と小さな魔法使い

2011年5月8日16時26分発行